

映画『私のはなし 部落のはなし』 寸評

福岡県地域人権運動連合会事務局長 植山 光朗 (本部事務局次長)

部落差別を「語ら」せ、問題解決の現状や「新しい差別意識」のスルー。解放同盟の許容範囲内のドキュメント映画だ。

はじめに

部落差別をテーマにした満若勇映監督は35歳と若く、タブーなく自然体でこのドキュメント映画を製作した。彼は「差別に苦しむ人の力になりたいとか、部落問題を周知させたいとか、の気高い志から製作したのではない」と言う。

監督も意識しない「部落排外主義」という「同和問題」の存在

「部落問題をもう一度向き合えないと映画監督として先にすすめない」と満若監督的な存在をうみ

映画は「部落差別問題」にどう対処するかと見る側に提起、あえて結論をだしていない。鑑賞者にそれぞれの立場で考え、行動を起こすことを求めている。部落解放運動論や政治色をカメラの外に置き、満若監督自身の「部落問題に対するドキュメンタリーの作り手としての義務感」から描きだしたものだ。彼は2007年に食肉センター(屠場)のドキュメント映画『にくのひと』を製作したが、解放同盟兵庫県連から「部落への差別

いままでにない「部落問題」をテーマにした映画で、語ることがタブーだった「血筋・血」の問題として差別する人の意識、差別をネットで煽る示現舎・宮部龍彦氏の言い分、「私たちを抜きに私たちのことを決めるな」と主張する解放同盟兵庫県連役員、「昭和の同和行政が部落差別をつくった」と述懐する三重

あったが部落での共同生活はよかった」という京都の高齢の女性たちなど、20人の肉声をたんと長回しで紹介している。玉石混交、見る人の立場で、それぞれ受け止める方が違うという問題提起型のストーリー。カメラはニュートラルだが、

京都、大阪、三重の老若男女の当事者から「体験談」を部落差別の「今」と昔から「語ら」せているが、選考が解放同盟関係者にかたよっており、同和問題を解決した和歌山や岡山などの自治体関係者や人権連(全解連)会員からの聞き取りは皆無である。満若監督の同和問題の捉え方は、解放同盟の目線とほぼ同じなのか、それとも「解放運動」に対する遠慮なのか。

と劣悪な住環境などの改善、特別扱いをしない同和行政と人権教育をすすめたことで部落問題の解決が見通せる段階に達しているとする私たち人権連の国民融合運動が、この映画では全く紹介されていないのが極めて残念であり、不満が残る。

映画の大枠の視座は解放同盟の「許容範囲」と指摘したのは、「部落民以外は差別意識を持っていない」とする朝田理論の部落排外主義が基底をなしていることである。満若監督は部落差別の不当性を告発する手法として、高齢者に数十年前の被差別体験を語らせ、現在の20、30代の若手には交際や結婚時に「部落の出自」の存在を指摘される不安を語らせている。しかし、そもそも「部落民」とは科学的根拠のない政治的・歴史的フィクションであり、「部落の出自」はその誤謬の延長線上の観念にすぎない。映画は当事者に差別体験や差別への不安・恐怖を語らせることで、観客に「部落差別意識の普

遍性」を抵抗なく刷り込み、「まだ、まだ部落差別意識は根強い」と意識させてしまう。基底には「部落は差別される側」「部落外は差別する側」という「部落排外主義」が隠されている。かつて朝田善之助氏は「差別という社会意識は空気のように存在、(部落外住民は)意識することなく空気を吸うように差別意識を吸収する」とする「朝田理論」は、解放同盟の運動理論となって猛威をふるった。

当事者たちの差別体験談という「語り」は、聞く側に差別を感情的に認識させる常套句だった。「解放教育」が猛威をふるっていた70年代、80年代ごろ、同和啓発は「語り」一辺倒で、「部落の悲惨さ」をことさらに強調し、部落のマイナスイメージを増幅してきたことを忘れてはならない。

だが、映画で完全にスポットをあて、同和行政の経過を紹介する。部落解放運動の成果、光の部分でもある。の幹部役員の利権あさり道具に利用され、同和利権・えせ同和団体を増幅させた。映画では三重の古老に「同和事業は、部落と部落外を分けて部落だけを改善し、地域に分断をもちこんだ。昭和の同和行政が部落差別をつくった」と同和行政を批判させている。示現舎の宮部代表にも「行政と解放同盟は同じ環境にある地域

隠蔽された

「同和行政窓口一本化」

映画は、部落の劣悪な環境格差を行政が放置してきたことと部落差別を再生産してきた社会的構造を「オール・ロマンス

事件」の行政闘争を契機に、国や地方自治体の責任と認めさせ、同和特別対策事業で環境を改善させたと京都の崇仁地区に

全国水平社創立100周年記念

特設ページ

http://zjr.sakura.ne.jp/zensui100/

「人の世に熱あれ、人間に光あれ」
あれから100年。

必見!! その願いはどこまで実現したのか

★全国水平社創立100周年記念動画

阪本清一郎、西光万吉、駒井喜作ら先達の足跡

★解放運動の担い手たち - 戦前編

○記念アピール賛同オンライン署名できます

○記念中央集会の最新情報をチェック



全国水平社創立100周年記念事業実行委員会

〒606-8103

京都市左京区高野西開町34-11 部落問題研究所内

連絡先 ☎ 075-721-6108

全水100周年記念動画

movies

全国水平社創立100周年記念動画

結婚のかへの変化

見る YouTube

この動画は全国水平社創立以来の100周年をどのようにまとめるか、チームで話し合い、アビリティを手がかりに作品化しました。運動に関わっている人にフォーカスをあてインタビューとアニメで作ることになりました。アニメキャラは運動に関わる人や場所を表すご当地キャラにし、その地域の言葉を大事にしてせりふを作りました。説明を要する箇所は、研究者が説明することとしてフクロウ先生のキャラを作りました。この動画が「全国水平社創立100周年記念アピール」の背景と内容の理解に役立つことを、作成チームの一同が願っています。

なお、この動画はホームページ上で公開するバージョンで、一人でも多くの人にアクセスしていただけることを期待しています。このほかに私共の関係者が集会を開いて、参加者の皆さんに直接観ていただく少し長めのバージョンも作っています。こちらは、集会での公表をご期待ください。

2022年3月3日公開

を「ここが部落」と線引きして、部落外の周辺地域を事業から排除、対立させた」と批判させている。

しかし、同和行政批判はこままで。乱脈不正な同和行政の元凶の解放同盟「窓口一本化」はスルー、公正・民主・公開の開かれた市民合意の同和行政で部落問題を早期に解消した全国各地の旧

同和地区と関係住民たちのとりくみの紹介は「意図的に」に排除されている。部落問題解決にとって一番、理解されやすい「問題解決のノウハウ」が紹介されない。

「いまだに部落差別は根強く残っている」とするこの映画のモチーフに合わないからなのか。部落問題を扱う意図は、なぜいまだに旧身分の尻尾

を引かずった社会問題としての差別問題が存在しているのか、なぜ解決できないで残っているのか。その「なぜか」という疑問の解明であると思う。部落問題の解決の結論は出さず、鑑賞者に委ねることでは否定しないが、解決済みの処方箋をあえて紹介しない意図は、私にはわからない。穿ちすぎだろうか。

スポイル(台無し)にされた 部落問題解決の現状と国民融合

この映画の脚本で一番大事な視点が欠落している。それは部落問題解決の歴史的過程である。確認・糾弾を解放運動の生命線とする解放同盟の「負の遺産」の批判的考証と部落内外住民の自由な交流で融合を図り、地域社会で部落問題のこだわりを解消し、解決する

とする国民融合の紹介であらう。それを裏付ける1993年の調査では67・5%、2005年の鳥取県調査では83・9%まで広がっている。若年層の間では、価値観も多様で「部落問題」に対するこだわりは薄れている。9割前後の結婚率はその現れでもある。

この映画は「部落に生きる人びとの不安や感情の機微」を描きだすとして、逆に

「部落差別」は、いかにしてはじまったのか、なぜ私たちは、いまもそれを克服できずにいるのか? という問いかけが、各地方の部落をめぐり、部落内外の住民の生活実態を捉えている。若年層の間では、価値観も多様で「部落問題」に対するこだわりは薄れている。9割前後の結婚率はその現れでもある。

この映画は「部落に生きる人びとの不安や感情の機微」を描きだすとして、逆に

「部落民以外は差別者」とする排外主義的な解放運動が盛んなところでは、部落に対する緊張感、忌避感情が根強く残っている。

『部落地名総鑑』は1975年に発刊された。前年の1974年11月22日の解放同盟による八鹿高校集団暴力事件が出版の動機になった。発行者の企業人材リサーチ協会(会長 楠 政一)は「八鹿高校問題のように暴力事件・リンチ事件が発生、これはいち高校の問題ではなく、企業でも起こりうる」として『地名総鑑』を企業に提供すると宣伝、発行している。

このように『地名総鑑』事件の元凶は、解放同盟の解放教育と暴力的な糾弾戦術という部落排外主義的な解放運動である。「糾弾は解放運動の生命線」という運動の下

宮部代表に密着取材し、同和行政と解放同盟

することなく結婚したケースも紹介されてはいるが、「部落の出自」をしっから相手や相手の家族に「宣言」して、説得、理解してもらって結婚することが「正統」であり、逃げたりさげたりすることを

後ろめたいふうを描く場面が強調されている。「部落差別が見えなくなっている」のは、部落問題を封印したり、さげているのではなく、これまでの社会的な取り組みの結果、日常生活の場で差別がう

すらぎ解消しているからだ。今日、部落問題はそこまで解決しているのが実態である。この映画の欠点は、部落問題解決の現状分析がスポイルされ、残った問題がクローズアップされている点である。

映画のなかで満若監督は、『部落地名総鑑』復刻出版事件裁判で解放同盟から訴えられ、被告として争っている示現舎の宮部代表に、同和行政と解放運動を批判させているのは意味深長である。

宮部代表は「小学校の同和教育で子どもたちに自分が被差別部落出身」と部落民宣言させることに違和感を覚えた。結婚差別があるといわれるのは同和事業や解放同盟の活動が盛んなところばかり。なにか苦言を呈すると徒党を組んで押し

「地区外の女生徒」が、部落の友人から「結局、おれらの気持ちがあわ

『部落地名総鑑』を誘発した 八鹿高校暴力糾弾事件

満若監督の現在の部落問題の捉え方は「同和タブー」を感じさせない自然体であると指摘したが、解放同盟の運動史批判が弱い。付度しているとは思わないが、『部落地名総鑑』復刻出版事件を批判するなら、なぜ『部落地名総鑑』が出版されたのかという背景にもメスを入れてほしい。

この映画は「部落に生きる人びとの不安や感情の機微」を描きだすとして、逆に

「部落民以外は差別者」とする排外主義的な解放運動が盛んなところでは、部落に対する緊張感、忌避感情が根強く残っている。

『部落地名総鑑』は1975年に発刊された。前年の1974年11月22日の解放同盟による八鹿高校集団暴力事件が出版の動機になった。発行者の企業人材リサーチ協会(会長 楠 政一)は「八鹿高校問題のように暴力事件・リンチ事件が発生、これはいち高校の問題ではなく、企業でも起こりうる」として『地名総鑑』を企業に提供すると宣伝、発行している。

このように『地名総鑑』事件の元凶は、解放同盟の解放教育と暴力的な糾弾戦術という部落排外主義的な解放運動である。「糾弾は解放運動の生命線」という運動の下

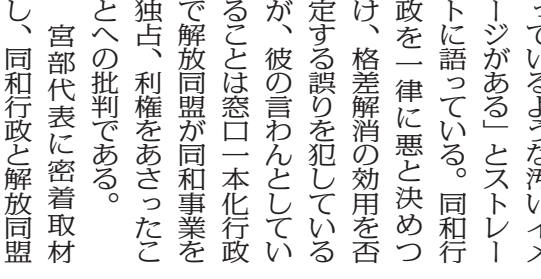
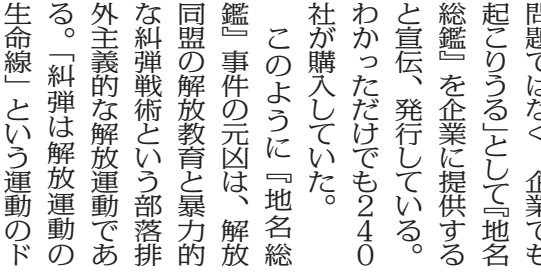
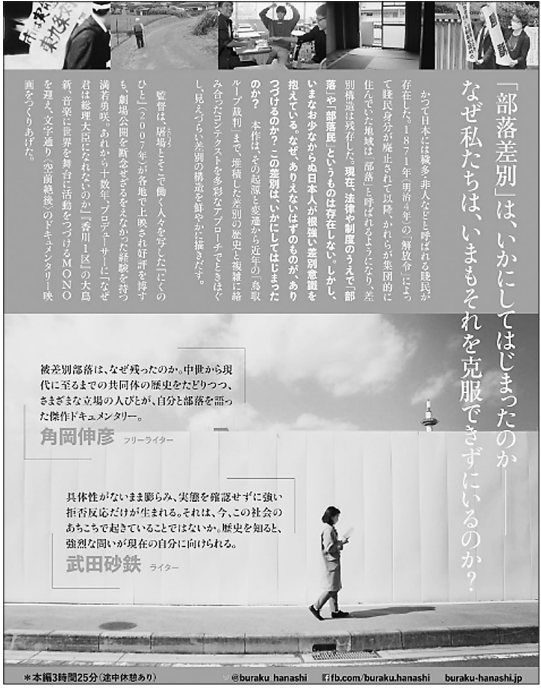
宮部代表に密着取材し、同和行政と解放同盟

示現舎という鬼子生んだ 同和教育の部落民宣言

批判を代理させた満若監督のバランス感覚はこの点では評価できる。しかし、先祖が元士族で身元調査は当然という60代の女性に「差別は、やっぱり血でしょう」と語らせていることは、部落問題解決にとりくんでいる立場からすれば違和感を覚えざるを得ない。

その一方で、中学校の放課後の学習会のシーンで、学習会に参加した見る人々に現在の部落差別について問題を提起する社会性の高い映画である。

て「確認・糾弾会」のイメージをこの映画で指摘してほしかった。



復刻 水平社運動の思い出 木村 京太郎著

部落問題研究所刊 383頁 2,200円(税込)

本書は木村京太郎著『水平社運動の思い出(上)―悔いなき青春』(一九六八年発行)、『水平社運動の思い出(下)―苦悩の半生』(一九七三年発行)を復刻したものである。

略歴	年	出来事
1902年6月	奈良県に生れる	
1922年4月	水平運動に参加	
1946年2月	部落解放全国委員会結成、中央常任委員	
1948年10月	部落問題研究所設立、常務理事	
1956年	部落解放同盟中央執行委員、中央本部会計	
1966年7月	荆冠友の会結成に参加、常任世話人	
1974年2月	「部落解放運動の統一と刷新をはかる有志連合」(「統一・刷新・有志連」)結成に参加	
1975年9月	国民融合をめざす部落問題全国会議結成に参加、幹事	
1988年6月	逝去(享年86)	

復刻 水平社運動の思い出 木村 京太郎